

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	四川・雲南境界部金沙江流域のカムチベット語における有気音の無気化現象
Auther(s)	鈴木, 博之
Citation	ニダバ , 40 : 75 - 81
Issue Date	2011-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045555
Right	
Relation	



四川・雲南境界部金沙江流域の カムチベット語における有気音の無気化現象

鈴木 博之

1 はじめに

チベット語の複数の方言では、複音節語の第2音節において閉鎖音・破擦音の有気・無気の無気音への中和現象が認められる。本稿で議論する言語現象もまた閉鎖音・破擦音の有気・無気の中和である。しかしながら、それが語中ではなく複音節語の語頭において生じるという点が特筆に価する。なぜならば、この種の現象がまとまって報告されていないからである。

1.1 有気・無気の中和現象

チベット語の語中における閉鎖/破擦音の有気・無気の中和現象は、さまざまな方言で指摘されている。枚挙にいとまがないため代表的な先行研究を挙げると、星 (2003:xiii) の中央チベット語 Lhasa (ラサ) 方言、格桑居冕・格桑央京 (2002:24) の中央チベット語 Shigatse (日喀則) 方言、格桑居冕・格桑央京 (2002:100-101) のカムチベット語 Derge (徳格) 方言など。また、チベット系言語のシェルパ語においても同様の現象が指摘されている (Tournadre et al. 2009:41-42)。なお、カムチベット語では摩擦音にも有気・無気の対立がある方言の場合、それについても同様の中和現象が認められる。

複音節語における有気と無気の中和というのは、それぞれ形態素分析した場合に個別の形態素では有気音が現れるが、複音節語を形成するときに当該箇所が音声的に無気音で現れるという有気音の弱化として認められる。格桑居冕・格桑央京 (2002:24) は中和現象を「有気音の条件変異」と分析する。実際の事例を考えると、ある複音節語を語として発音した場合と構成するそれぞれの音節 (形態素) を人為的に区切って発音した場合とを比較することを通じて確認することができる。後者では有気音として実現される一方、前者では無気音になるから、これを有気音の無気音との中和と考えるのである。より簡便なのは、チベット文語つづり (以下「蔵文」と口語形式を比較することで、語中にくる音節に有気音字が用いられていても有気音で対応しないことによって確かめることができる。

カムチベット語 Derge 方言について見ると、以下のような例がある。

蔵文	形態素ごとの発音	Derge 方言	語義
<i>phag phrug</i>	^h pʰaʔ, ^h tʰuʔ	^h pʰaʔ tʰuʔ	子ぶた
<i>phag tshil</i>	^h pʰaʔ, ^h tsʰi:	^h pʰaʔ tsi:	ラード
<i>brag phug</i>	^h tʰaʔ, ^h pʰuʔ	^h tʰaʔ puʔ	洞窟

確かに、形態素ごとの発音では有気音であるものが、第2音節にきた場合、無気音として実現されている。Derge 方言においてこのような例は語中でのみ認められる。多くのチベット語方言の記述で指摘されているのは、この Derge 方言と同様の事例である。もしこのような現象が語頭で見られるならば、それが出現環境として有標であるといえることになる。

1.2 扱う方言の分布地域と方言所属

語頭における閉鎖音・破擦音の有気・無気の中和現象が見られるのは、筆者の現段階での調査によると、四川省と雲南省の境界部で、かつ金沙江流域の諸地域に分布するカムチベット語に限定される。具体的には、四川省では甘孜藏族自治州得榮県の一部の方言、雲南省では迪慶藏族自治州徳欽県の一部の方言が該当する。当該現象が認められる方言で、筆者が記録した主なものは以下の通り。

sDerong (得榮) 方言

Zulung (日龍) 方言

sPomtserag/sGogrong (奔子欄/古龍) 方言 (以下 sPomtserag 方言)

sPomtserag/Shogsum (奔子欄/書松) 方言 (以下 Shogsum 方言)

Suzuki (2009a:17) の方言分類において、以上の方言はみな sDerong-nJol 方言群に属する。その中で sDerong 方言、Zulung 方言は同方言群の sDerong 下位方言群に属し、sPomtserag 方言及び Shogsum 方言は同方言群の sPomtserag 下位方言群に属する。

2 2音節語の語頭における有気・無気の中和

本稿で扱う方言は、いずれも閉鎖音・破擦音のみならず摩擦音においても有気・無気が対立するが、これは蔵文との対応関係を予測はできるが確定することはできない。蔵文には摩擦音の有気・無気の対立がないからである。本稿では、問題となる中和現象を蔵文との対応関係に基づいて扱うため、閉鎖/破擦音に限って扱うことにする。なお、蔵文形式は Wylie 方式に基づいて転写する。

2.1 sDerong 下位方言群における例

sDerong 下位方言群のうち、筆者が記録したもので問題となる有気・無気の中和現象を確認できたのは、sDerong 方言と Zulung 方言である。ただし前者は収集した語数が少なく、ま

た見られる例も通常の発話で有気音で発音されても許容されるという点で、完全に音声的に中和しているとは言い切れない。そのため、ここでは Zulung 方言について述べる。また、sDerong 方言の中で中和に関する注目すべき現象が別個存在するため、後の節で扱う。

Zulung 方言における有気・無気の中和現象は、以下のような例に見られる。

語義	Zulung 方言	蔵文
氷	ʼtɕa dõ	<i>chab rom</i>
泉	ʼtɕa ɲiʔ	<i>chu mig</i>
温泉	ʼtsa: tɕʰu	<i>tsha chu</i>
八日 [地名]	ʼɲpa: rə	<i>ʼphags ri</i>
唇	-ʰtɕu ru	<i>mchu ru</i>
脇	-ʰtɕɛ kʰõ	<i>mchan khang</i>
親指	ʼtə tɕʰɛ	<i>mthe chen</i>
犬歯	-ʰtɕi wa	<i>mchi ba</i>
友人	ʼpu ɕaʔ	<i>pho shar</i>
孫息子	ʼtsa wu	<i>tsha bo</i>
孫娘	ʼtsa fiõ	<i>tsha mo</i>
桃	ʼka mõ	<i>kham bu</i>
粥	ʼto: ba	<i>thug pa</i>
階上	ʼkõ tʰuʔ	<i>khang thog</i>
階下	ʼkõ zoʔ	<i>khang zhod</i>
ふた	ʼka ləʔ	<i>kha leb</i>
縄	ʼta: pa	<i>thag pa</i>
経堂	-tɕu: kʰõ	<i>chos khang</i>
経院	-tɕu: ʰde	<i>chos sde</i>
白塔	-ʰtɕu: qĩ	<i>mchod rten</i>
区別	-tɕe: pa	<i>khyad par</i>
昨日	ʼka tsõ	<i>kha rtsang</i>
大きい	ʼtɕa wu	<i>che bo</i>
別々の	ʼka kʰa	<i>kha kha</i>

これらの例はすべて、初頭子音が無気音だけでなく有気音も許容されるが、それは調査時に何度も発音を確認した場合いわば人為的な発話環境において観察された現象であって、通常の発話ではほぼ無気音で現れる。有気音の実現形はおそらく 1 音節の形態素のもつ音価もしくは文語読書音であり、複音節語の口語形式としては無気音のみを考えるべきであろう。この点において、sDerong 方言の場合は特定の少数の語彙を除いて通常有気音も無気音も許容されるため、異なる性質のものと考ええる。

以上の例を見るとほとんどが名詞であって、動詞は明確に有気・無気が中和しているといえる例が見られないということになっている。さらに注意すべきは、この現象は語彙的なものであって、同一の形態素が第 1 音節にくる複音節語のすべてにおいて有気音が無気音に中和するとは限らない点である。すなわち、有気音の無気音との中和は現在の口語形式では音

韻規則によって自動的に生じるのではなく、語ごとに異なるのである。たとえば1音節の形態素で語でもある $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w}$ 「水」(蔵文 *chu*) について考えると、以下のように中和せず有気で現れる方が大半を占める。

1. 無気音で現れる例

$\text{'tɕu} \text{ni?}$ 「泉」(*chu mig*)

2. 有気音で現れる例

$\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{lu?}$ 「水害」(*chu log*)、 $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{ra?}$ 「土手」(*chu rag*)、 $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{zɿ}$ 「水田」(*chu zhing*)、 $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{jɔ}$ 「水牛」(*chu glang*)、 $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{za}$ 「鴨」(*chu bya*)、 $\text{'tɕ}^{\text{h}}\text{w} \text{ra}$ 「水がめ」(*chu ra*) など

このようなことから、Zulung 方言では語頭での有気・無気の中和が有気音の条件変異であると考えることができない。

また、語頭の有気・無気の中和によって生じる興味深い現象があり、それは無声無気音に前鼻音が先行するというものである。チベット語について、この子音連続は珍しく、通常は有声音と無声有気音にのみ前鼻音を伴うことができる。Zulung 方言では有気音が無気音に中和した後も前鼻音をほぼ体系的に保っている点で特筆に価する。

2.2 sPomtserag 下位方言群における例

sPomtserag 下位方言群のうち、筆者が記録したもので問題となる有気・無気の中和現象を確認できたのは、sPomtserag 方言と Shogsum 方言である。これら2つの方言は、母語話者の感覚としては非常に近い関係にあるとされているが、問題とする中和現象については違いが大きい。前者では少数例にしか見られないが、後者では多くの例に見られる。

以下は sPomtserag 方言の例である。

語義	sPomtserag 方言	蔵文
雨	$\text{'ce} \text{wa}$	<i>char ba</i>
溝	$\text{'ca}^{\text{h}}\text{ka}$	<i>chu rkq</i>
唇	$\text{'cu} \text{pa}$	<i>mchu pa</i>
甥	$\text{'tsa} \text{wo}$	<i>tsha bo</i>

sPomtserag 方言の特徴は、これらの語の語頭子音は無気音のみが許容され、有気音の異音が含まれない点にある。これらのほかにも、語頭子音が有気・無気の揺れを見せる2音節語が若干ある。

語義	sPomtserag 方言	蔵文
大きい	$\text{'cə} \text{wo} / \text{'c}^{\text{h}}\text{ə} \text{wo}$	<i>che bo</i>

以下は Shogsum 方言の例である。

語義	Shogsum 方言	蔵文
雨	'ce wa	<i>char ba</i>
土手	'ca raʔ	<i>chu rag</i>
唇	'cu pa	<i>mchu pa</i>
肝臓	'ci mba	<i>mchin pa</i>
つば	'ce mō	<i>chu ma</i>
甥	'tsa wu	<i>tsha bo</i>
鴨	'cu ʒa	<i>chu bya</i>
鳩	'pu qwī	<i>phug ron</i>
桃	'kā mo	<i>kham bu</i>
屋根	'ko ^h ti	<i>khang steng</i>
傘	'ca ^h doʔ	<i>chu gdugs</i>
縄	'te jiʔ	<i>thag pa</i>
昨日	'ka tsō	<i>kha rtsang</i>
おととい	'ke ɲi me	<i>khas nyin</i>
あなたたち	'tɕi ɲa ji ʈa	<i>khyod tsho</i>
大きい	'cɣ fiu	<i>che bo</i>

以上の例を見ると、先述の Zulung 方言と同じく、動詞については当該現象が見られないことが分かる。

また、Shogsum 方言において 'ka dze 「どうもろこし」 はナシ語 k^ha¹¹ dze³³ 「どうもろこし」 からの借用語と考えられるが、Shogsum 方言の形式は語頭の有気・無気の中和を反映しているものと理解できる。

3 1 音節語における中和現象

蔵文で 2 音節で構成される語が口語形式で 1 音節に縮約した場合でも、いくつかの語では「語頭における有気音の無気音化」が見られる。その背景として、まず 2 音節形式の段階で語頭における有気/無気の中和が起こり、そののち 1 音節化したものと理解するのが妥当であろう。実際 Zulung 方言では、蔵文第 2 音節が *pa, ba, ma, po, bo, mo* の場合に 1 音節になっている例がある。

以下は Zulung 方言の例である。

語義	Zulung 方言	蔵文
雨	'tɕa:	<i>char ba</i>
雪	'ka:	<i>kha ba</i>
腸	'dzā:	<i>rgyu ma</i>
鍛冶屋	'ɲga:	<i>mgar ba</i>
娘	'pō	<i>bu mo</i>

sPomtserag 方言と Shogsum 方言でも同様の例が 1 例みられる。

語義	sPomtserag 方言	Shogsum 方言	蔵文
雪	'ka:	'ka:	<i>kha ba</i>

3つの方言に共通の「雪」について詳しく見ると、蔵文 *kha ba* から想定される音を *k^ha wa とすると、まず複音節語における語頭の有気・無気の中和が起こり *ka wa となり、この 2 音節が縮約して 'ka: のように変化したと考えられる。このことから、語頭における有気・無気の中和は 1 音節化する以前に起こっていたものと推定される。

4 無気音の「子ぶた」たち

以上に見た語頭における有気・無気の中和現象を整理していくと、実際のところいずれの方言でも音韻に条件づけられる規則的な中和は認められない。

複雑なのは、Zulung 方言の 1 音節の形態素それ自体が、蔵文で初頭子音が有気音であるにもかかわらず無気音で現れる例が存在することである。たとえば、⁻tsə 「犬」(*khyi*) があてはまり、⁻tsə^htsa? 「犬の糞」(*khyi skyag*) といった例は有気・無気の中和とは異なる。

本稿で扱う方言には、共通して語頭子音が無気音で現れる「子ぶた」がある。この問題は鈴木(2007)および Suzuki (2009b:80-81) で扱われている。以下に「ぶた」とともにその語形を示す。

方言	「子ぶた」	「ぶた」
Zulung	'pə fiu	⁻ p ^h a?
sDerong	'pu:	⁻ p ^h a?
sPomtserag	'pe dɣ:	⁻ p ^h a?
Shogsum	'pi: dwe	⁻ p ^h a?

いずれの方言でも「ぶた」は有気音で始まり、蔵文 *phag* と対応する。ところが「子ぶた」の場合は、初頭子音が無気音しか許容されない点で、他の有気・無気の中和現象とは若干異なる。ここに sDerong 方言の例が出てくるのであるが、sDerong 方言の場合は初頭子音が無気音かつ 1 音節である点特徴的である。おそらく起源的には、sDerong 方言の形式は Zulung 方言の形式の音節縮約によって発生したと考えるのが自然である。Zulung 方言の家畜の指小辞は fiu で、「子ぶた」の形式は「子馬」⁻h^{te} fiu や「子綿羊」⁻ju fiu などと並行する。その場合、縮約が起こる以前に 2 音節語の音節初頭における有気・無気の中和が起こっている必要がある。sDerong 方言ではこの中和が音声学的に有気・無気とも許容されるという不完全な形で実現されるが、有気音の無気化は早い段階で起こっていたと考えられる。

これに関連する事例が得楽県で話される mPhagri (八日) 方言 (Chaphreng 方言群 gTorwarong 下位方言群に属する) に見られる。この方言には語頭における有気・無気の中和は

基本的に見られないが、語彙的な面で以上に述べた事例と関連するものがみられる。たとえば、「子ぶた」は'po fu で、「雪」は'kō:/kō:/である。また、「犬」は'ts^həであるのに、「めす犬」は'tsə mo で「犬の糞」は'tsə^htsa? となる。そして、有気・無気は交替せず、そのほかの例で有気・無気の中和と見られるものは、現段階では認められない。

「子ぶた」の例は、一種の地域的な性格をもつ語の1つである可能性があるが、その背景には語頭における有気・無気の中和をもつ方言の存在との関連が認められるといえるだろう。

5 まとめ

本稿では、これまで体系的に指摘されたことのなかった、語頭における有気・無気の中和を共時的に記述した。この現象が認められる方言が四川省と雲南省の境界部かつ金沙江流域の諸地域に分布するカムチベット語に限定されることにも注目できる。今後この現象が成立した音声学的背景について研究を進める必要がある。

参考文献

- 鈴木博之 (2007) 「川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語」『京都大学言語学研究』第26号 31-57
- 星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology* (No. 16102001) *Report* Vol.3, 15-34
- (2009b) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology
- Tournadre, Nicolas et al. (2009) *Sherpa-English and English-Sherpa Dictionary with Literary Tibetan and Nepali Equivalents*, Vajra Publications
- 格桑居冕・格桑央京 (2002) 《藏語方言概論》民族出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成16-20年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者:長野泰彦、課題番号16102001)および平成19-21年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」の援助を受けている。